

2022（令和4）年度 総合型選抜入試 体験型 <体験2の課題>

体験型の②自宅等で課題を読んで作文を作成するタイプを受験する人は、次の課題文を読み、「総合型選抜入試要項」の巻末にある原稿用紙に、自分の感想を入れて内容を400字から800字以内にまとめ、エントリーシートとともに提出してください。なお作文は手書きでもワープロでも、どちらでも構いません。

課題文

自然とフランク・ロイド・ライトの建築

わが国の人びとは、自然と一体になった生活を尊んできたはずであるが、明治以降、経済的な豊かさを求めて自然を破壊して工場を建て、海浜を埋め立てて石油コンビナートを建設してきた。しかし近年、自然の大切さを認識し始め、緑豊かな居住環境を求めるようになってきた。自然と共に暮らす住まいの大切さがわかってきたのである。さらに次世代にむけて持続可能な社会を実現するためには、地球環境に修復不可能なダメージを与えない範囲で開発をしなければならず、自然の保護がひじょうに大切になってきた。もし自然を破壊し続けていけば、地球環境におおきなダメージを与え、我々に未来はない。

人工物である建築が自然と調和するためには、発想の転換が必要である。自然と建築の関係を深く追求したアメリカの建築家フランク・ロイド・ライト（1867—1959）の偉業の中にそのヒントがかくされているかも知れない。

20世紀には、建築の歴史に残る数多くの建築家があったが、自然破壊に警鐘を鳴らし、建築は自然から学ぶことが多いと唱えた者は少ない。ライトは、自然をテーマにした数少ない建築家であった。彼は、日本の浮世絵の収集家であり、明治村に保存されている帝国ホテルの設計や兵庫県芦屋市にある旧山邑（やまむら）邸（国の重要文化財）の設計で、日本にゆかりのある建築家である。東京に建てられた帝国ホテルでは、栃木県産の大谷石が使われている。栃木県は東京から少し離れているが、現地に産する材料を使うことは、どこに建物が建てられたかという土地の証しとなっている。

ライトは有機的建築（organic architecture）を唱えた。この有機的（オーガニック）という意味を辞書で調べると、自然物、環境、生成発展、生体組織といったさまざまな意味がある。ライトの言葉は難解であるが、有機的建築を樹木に喩えると何となく言いたかったことがわかるであろう。樹木は、大地に根付いて、日光や風といった環境に向かって成長し、中心の幹から枝は広がっていき、調和をもった生体組織を形成する。ライトは、大地を重視し、暖炉や台所などの住まいの中心から、枝をのばすように広間や部屋を配置することが多かった。

彼は、多くの住宅を設計したが、どのような魅力があったのだろうか。とかく比較されることが多いフランスの建築家ル・コルビュジエは、住宅を大地から持ち上げるピロティ形式を提唱し、大地と住宅を切り離して大地の影響を住宅が受けないようにした。そして傾斜した屋根ではなく、平らな陸屋根（ろくやね）にして屋上に庭園をつくりなさいといった。それに対してライトは、プレーリー（草原）住宅と呼ぶシリーズでは、部屋を垂直に重ねて四角の箱のようにするのではなく、大地に沿って広げて水平線を強調し、屋根はゆるい勾配をつけて軒を深く出して、家全体をおおった。また旧山邑邸のように眺望のよい崖のような敷地にも住宅を設計した。ライトはどのような自然地形もいとわず住宅を設

計した。このようなライトが提唱した住宅のあり方に、自然と共にある生活の魅力が見えてくる。

ライトが設計した落水荘は、あまりにも有名である。依頼者のカウフマン氏は広大な森を所有し、森の中の小川の滝を眺めて週末を過ごす別荘の設計を依頼した。ライトは、滝のそばではなく、滝の上に別荘をつくることを構想し、カウフマン氏を驚かせた。彼は、滝の岩棚を構造基礎にして、滝の上に覆いかぶさるようにテラスを持ち出したダイナミックな空間構成を提案した。まるで京の貴船の川床（川の中に設ける納涼床）を連想させる構えである。もうひとつの特徴は外と内の関係である。落水荘の写真集をみるとリビングルームの暖炉床は荒々しい岩盤そのまま、床は凸凹した自然石が使われて、外にいるような錯覚におそわれる。外と内が入り交じる関係をライトは大切に、各寝室から滝の上にあるテラスに直接出入りできるようになっている。

ライトは森林の中だけではなく、砂漠にも住まいと設計工房が一緒になった建物を建てた。その代表格がアリゾナ州に建てたタリアセン・ウエストである。敷地付近に産する岩石を利用して壁をつくり、屋根はキャンバスでつくって開閉できるようにした。

彼は住宅だけを設計したのではない。ライトの建築作品 8 件はアメリカで初めての建築の世界文化遺産になったが、そのうちの一つにニューヨークのソロモン・グッゲンハイム美術館（1959 年完成）がある。設計の原案は 1940 年代にできていたが、完成が遅れた。背景には、巻き貝のような奇妙な形態が災いしたのかも知れない。ライトは「自然に学べ」ともいったし、巻き貝の美しさを紹介し、建築の発想の源は自然の中にあると説いているので、決して奇抜さをねらったわけではないだろう。しかし古代ギリシャ建築の古典様式を美術館の建築様式として期待する当時の人達には、巻き貝の形態は認められないであろう。

どのような敷地条件であっても、可能性を見出し、挑戦するライトの姿勢には創造性がある。しかし 20 世紀の巨匠といわれるミース・ファン・デル・ローエやル・コルビュジェのように、どこにでも当てはめられる一般解の設計モデルを提案していない。ライトは特殊解の建築家だといった評論家がいたが、ライトは、自然と建築の関係を常に考え「自然に学べ」という姿勢をわれわれに残した。そしてライトは「あなたの最も偉大な建築作品は」と問われて「私の次の作品です」と答えたというエピソードが伝わっている。彼は建築をめざす若者を鼓舞してくれる言葉も残した。

以上